



Title	堀直さんと歩んだ歳月：思い出の記
Author(s)	梅村, 坦
Citation	日本中央アジア学会報, 16, 19-26
Issue Date	2020-07-31
DOI	10.14943/jacas.16.19
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88521
Type	article
File Information	JB016_002umemura.pdf

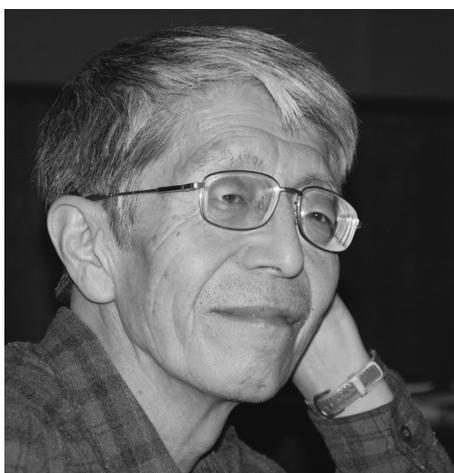


[Instructions for use](#)

堀直さんと歩んだ歲月

— 思い出の記 —

梅村 坦



東京にて (2008年)

まだ永久の別れをした気がしない。

命日となった2020年1月17日は奇しくも阪神淡路大震災が発生した日からちょうど25年目にあたった。— あのかきは日が経ってようやく電話がつながった。西宮のお宅の屋根瓦がすべて飛んで落ちたという。ひと月以上を経てからだだったか、震災見舞いに訪れた。ご家族もみな無事だったが、神戸の街まで足を伸ばすと道は瓦礫であふれ、電柱が一斉に傾き、民家もビルもあちこちの方向に倒壊していた。眩暈がした。心身が記憶した。

いま、病に急かされるが如くに旅立った堀さんにつながるものが、新型コロナウイルスの猖獗に隠されてしまった。「堀直さんを偲ぶ」大小の会があちこちで無期延期のやむなきに至った。言い訳は立つが情が立たぬ。顔を合わせて彼のことを語り合う日の来ることを願う。

堀直(ほり・すなお)さんは仲間うちからはホリチョコと呼んで親しまれた。私は東京教育大学文学部史学科東洋史学専攻の1年後輩にあたるが、浪人していたので彼より月齢で1か月上だった。しかし学年でいう先輩後輩の序列は体育会系でなくとも守られる。しかも胡亂な私とちがって、堀さんは早くから明晰な研究方向をもっていて、新入生を集めて「東西交渉史研究会」(シルクロード研究会=シル研と俗称)を立ち上げた。堀さんは学問に取り組む手順・興味関心への眼差しといった基本姿勢に目を開いてくれた恩人であり、半世紀を超える友であった。

堀さんの学部時代(1965～1970)の研究会活動を思い返すと、「シル研」メンバーは生意気にも指導教授の中嶋敏先生から紹介状を得て東洋文庫へ希少文献を漁りに出た。また1966年12月に発足したインターカレッジの「アジア文化研究会」に堀さんを筆頭に参加して、今にいたる広い交友の一端を切り開くことになった。のちに1975年、阪大の堀さんの先輩森川哲雄さんとたちあげた「若手ユーラシア研究会」は、関西における堀さんの拠り所となった。特筆しておきたいが、堀さんは東大の東洋文化研究所が所蔵する「葉爾羌城莊里數回戸正賦各項冊」(大木文庫)の調査を始めるなど、かなり早熟で学問に積極的な学部生であり、この資料を元にしたヤルカンドオアシス研究は彼のライフワークの一つとなった。

1969年早春、いつもの梁山泊のようなたまり場で中央アジア旅行が話題となり、翌朝林俊雄さんと3人で、電車を乗り継いで旅行社に押しかけソ連旅行を予約した。前嶋信次、松田壽男両大家が解説者として——両先生とも初めての中央アジアということだったが——同行するという超贅沢な旅で、ナホトカ・ハバロフスク・ノヴォシビルスク・タシュケント・サマルカンド・ブハラ・トビリシ・ソチ・モスクワという初めての国外旅程のあいだ3人とも興奮しきっていた。

こうした喜びも交えながら、学園闘争にも真面目に取り組んだ堀さんは卒業に5年をかけたが、私も序列を乱すことはしなかった。堀さんは卒業後一旦、大分の郷里に帰ったあと、大阪大学の山田信夫先生の門をたたき、人生の拠点を関西におくことになった。

1971年からの大学院修士・博士課程で、山田先生の方針もあって大阪のみにとどまらず京都とも密接にかかわりながら研鑽を積み、日本学術振興会奨励研究員を経て1980年4月には大阪大学文学部助手となった。私はその間にも新婚時代をふくめて堀家を不遠慮に訪ねては泊まりこんで、関西の同世代の仲間たちと親交を深めさせてもらった。こうした堀家をご本人は、道筋とは無関係に「東海道堀の宿」と称した。訪う者を拒まず、どれほど多くの人がその世話になったことだろう。関西の新たな梁山泊となった。

阪大助手のあとの堀さんは、1980年10月には早くも甲南大学文学部に助教授として赴任し、90年に教授に昇任、つごう28年間勤めた。2008年、堀さんは視力が落ちたとか、親友の他界がきっかけになったとか幾つかの話を大学時代の旧友たちに回顧することもあったが、甲南大学の定年を待つことなく退職し、あえて大学の外で学問人生を楽しむ道を選んだ。

堀さんは眼鏡の奥の眼を輝かせながら、人との会話をとても大事にした。いつも堀流ユーモアを含んだ話術は巧みであった。授業もそのようにして、おおいに学生を惹きつけていたにちがいない。堀さんから切り離すことのできない酒はどこまでも外向きで、豊かな知識を背景に談論風発、森羅万象にわたりながら話題は広がりかつ深まった。堀さんの話は「イワシの尻尾からクジラができあがる」と誰かが評したような、そんな語り口が皆に愛された。私の記憶でも、その片鱗は若いときから現れていたように思う。愚図愚図と惑うままでいる

ことを潔しとせず、決断、断言していくと、あなるのではないか。酒の席のことだが。

さて、堀さんは中国新疆ウイグル自治区の区都ウルムチに1987年の8月から翌年の4月まで、秋口から春先まで滞在した。例の口吻によれば、新疆大学に落下傘で飛び降りたのだった。まったく同じ年、私はそのこともよく知らないまま、半年の北京滞在を終えて9月に北京からの列車でウルムチ入りした。短い秋も終わろうとしていた。しばらくぶりの邂逅といったところだった。共通のウイグル人の友がいた。当時のウルムチには日本の商社トーメンの駐在員一人、亜細亜大学から新疆財經学院に留学中の学生が一人、88年の正月を迎えて4人でウルムチ日本人会をたちあげようというオルガナイザー堀さんの提案で私は印鑑を発注しようとしたが、政府公認団体の手続きが必要だそうで、やむなく断念した。

ウルムチでの生活は楽しかった。堀さんは街の南端近く、旧市街区のウイグル人の多い地区、新疆大学キャンパス内の暖かいボイラー室傍に部屋を借り、私は新市街の北部、漢人の多い新疆社会科学院所属の訪問学者となっていて、宿舎は人民会堂前の崑崙賓館（八楼）を指定された。それぞれに現代ウイグル語の勉強をしていたが、ウイグル人社会に近い堀さんの環境は恵まれていたと思う。ここでも堀さんには一日の長があり、生活の知恵をずいぶん教わったが一度裏切った。南北に長いウルムチ市街を書店や郵便局に立ち寄りながら縦断して、互いの宿舎を、徒歩で1時間ほどをかけて往来していたあるとき、道端の移動式屋台の本屋で遠くから『五体清文鑑』を二人同時にみつけたが、私の方が一言早く値段交渉をして購入した。「お前より俺のほうの専門だ」と堀さんは怒った。たしかに本の虫の彼はウイグル語の専門雑誌のバックナンバーをせっせと集めつづけた。まだとても豊かとはいえない時代で怪しげなルートで出回るものもあった。貴重なコレクションである。物資とくにビールと食料の補給に便利だった私の宿に堀さんが来て泊まる——酔いつぶれて——こともよくあったし、私が過労で臥せていたときなども泊りがけで食堂から食事を運んでくれたもので、心強かった。

堀さんはまさに大木文庫の清代土地台帳の現場、ヤルカンドオアシスの集落、モスクや河川、水利の現地調査実施にその当時から道を切り開こうとしていた。私はウイグル古文書や仏教遺跡の探索、オアシスの物見遊山と歩き回った帰り、カシュガルからは二人で車を雇って天山南路北道を東へ戻り、また凍てつくコムル(哈密)やトゥルファンを訪れたこともあった。四十を超えた弥次喜多は、ときに天山の懐(ウチトゥルファンなど)に飛び込んで天幕の中で枕をならべ、クチャの宿ではキジル千仏洞保護に乗り出そうとする小島康誉さんに出会い、現在の繁栄はむしろ幻か沙漠の蟹気楼、おそらく20世紀初頭の面影のほうが濃いようにさえ感じられるウイグル人のオアシス農村や都市民の営みに、目を凝らしつづけた。堀さんの頭の中には埃っぽい清代回疆社会の映像が結ばれていたのではなからうか。

こんな新疆の空気を味わうよう、堀さんをご家族を呼び寄せた。小学生の長男はロバを土

産に持ち帰りたいと言ったと聞く。大成功である。ともあれ、長期滞在を機に、ウイグル人の先生やその関係者とも親交を深めていった堀さんは、多くのウイグル人留学生を私邸に受け入れてそれぞれ立派に送り出し、またウイグル人楽団が東京に来た時などは、率先してかれらの楽器を買い取って資金援助を惜しまなかった。みなこれ見習うべき交流の姿勢であろうと思うが、並みの人が能く真似るところではない。

清代回疆社会経済史、これは堀さんが自らの専門を表現していた分野名称であると心得ている。後掲の業績一覧からも明らかのように、社会経済の基本的な要素である人口、度量衡、貨幣制度といった基礎をかためつつ、水利灌漑、街区住民の実態を明らかにしようとする研究には、従来から利用されてきた漢文史料はもとより、現地調査の成果やチャガタイ語文書資料、さらにマンジュ語史料の利用を開拓していき、それらの資料探索や現地観察を長年にわたって継続した。なかでも非漢文史料の紹介・利用はこの分野において新境地を開くもので、後進に多大の影響を与え、自らの研鑽にも余念がなかった。また上にも述べたように、ヤルカンドオアシスを自然状況と歴史の中に位置付ける試みは、講演、エッセイ、論文と形を変えながら花開き、大規模オアシスの全容を俯瞰する展望台をいくつか設営した。

研究論文のほかに、口頭報告を多くこなしていた。本人は自らの語りを楽しみながらイスラーム社会・回疆の住民生活とその知恵を掘り下げていたのではないかと想像している。

文献大好きのほかにも、もうひとつ堀さんを語るキーワードは現地の眼もしくは現場主義だろう。これは戦後中央アジア史研究のうえでは1970年代の私たちの世代くらいから主張されてきたことばだと私は理解する。現地語史料の活用・新発掘という意味のほかにも、次第に訪問できるようになっていった中央アジア現地に足を踏み込んでみようということだ。たしかだと思ふことは、現地に住んではじめて社会と人びとを理解し、歴史上の社会に遡るヒントも得られる、史料を読む視線も新鮮になるということである。そうなれば、学問的動機にもとづいた現地訪問にも、現地の研究者、市井の民との交流にも豊かさが増し、史料公開の機運にも反映されていく。こうした手順はいつしか空気存在のように当然のこととなったが、ほとんどゼロから始まった時代のプロセスを堀さんと共に歩めたのはありがたいことだと思う。

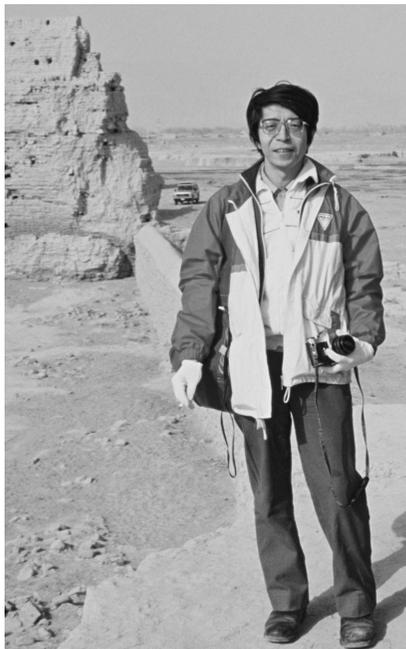
だが、今、私たちにとって新疆の現地を訪れることが自由でなくなったのは、無念という以上の言葉を探さなければならない。多くの連絡が途絶えてしまった。半世紀の流れが止まり逆流している。堀さんはそうした現状に鋭い言葉をあびせていた。「退職してから、私は一度も新疆へ行ってないし、たぶん今後もヤルカンドを訪れることは無いであろう。おこがましくも、今の条件での『見るべきほどのことは見つ』が正直な心境である。実は農村に住み込んで聞き取り調査や現地行政府との協力を模索したこともあった。けれども現地の民族事情に接する毎に、当事者たちへの不利益に思い至って断念した。」と（「1983～2007年

の新疆事情調査」2017年)。こんなことになるまで、東西トルキスタンを何度訪れたことだろう。夏になると日本にいなくなる。こうした現地主義は日本の中央アジア史研究の方法論の一つとして定着した。堀さんはそうした流れを築いた人物の一人である。それだけに堀さんの慨嘆の深さを推しはかることができる。

最晩年、極端にナショナリスティックな言辞で私たちに訝らせたが、そこには現地ウイグル人への意識があったのだと考えれば納得がいく。住民の境遇へのシンパシーと、同時にまったく逆の絶望。だが、心の真の回線まで入り込むことはもはや不可能となった。もっと長く、語り合う時間があるとばかり思いこんでいた。

堀さんは生涯かけて集めた内外の新疆関連の史料、稀覯書、雑誌を、退職後に惜しげもなく広く寄贈し、後進の利用に託していった。日本のみならず韓国、中国の研究者や大学その他の機関に及んでいて、そうした土壌からいつの日か必ずや新たな学徒・研究者が育っていくに違いない。

このように私たちが堀さんに導かれ、世話になった横に、富美子夫人がおられる。夫人は、いま、直さんはまた夏の旅に出ている感じだと言われた。私も同じ気分になりたい。ここで私事ばかり連ねたことも堀さんなら許してくれるだろうことを願いつつ、堀さんの残した成果をふりかえり、そしてどこか遠い世ででもゆっくりと酌み交わしながら、共に過ごした年月を語りあいたいと思う。



トルファン高昌故城にて (1988年)

主な刊行業績*

- 1969年 「カシュガル汗国の成立について」『アジア文化研究』2, 34-49.
- 1975年 「明代のトゥルファーンについて」『待兼山論叢(史学篇)』8, 13-37.
- 1977年 「18～20世紀ウイグル族人口試論」『史林』60(4), 111-128.
- 1978年 「中央アジア及び西アジアに関する明代の一史料：「西域諸国」と「西域土地人物略」について」『イスラム世界』14, 37-55.
- 「18～20世紀ウイグル族の度量衡について」『大手前女子大学論集』12, 57-67.
- 1979年 「清朝の回疆統治についての二、三の問題：ヤールカンドの一史料の検討を通じて」『史学雑誌』88(3), 1-36.
- 「清代回疆の交通事情：軍台と卡倫を中心として」『大手前女子大学論集』13, 95-107.
- 1980年 「清代回疆の水利灌漑：19～20世紀のヤールカンドを中心として」『大手前女子大学論集』14, 72-99.
- 「清代回疆の貨幣制度：普爾鑄造制について」『中嶋敏先生古稀記念論集(上)』汲古書院, 581-602.
- 1982年 「15～16世紀の東西交易路の一斑：『西域土地人物略』地名考証」『文部省科研「アジア東西交渉史の基礎的研究」研究報告書』, 49-68.
- 「『西域土地人物略』について」『歴史における民衆と文化：酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集』国書刊行会, 831-844.
- 1983年 「トゥルファンのカーレーズ小考」護雅夫『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社, 459-480.
- 1984年 「回疆の水資源に関する覚書：『新疆図志』『溝渠志』の整理を通じて」『佐藤博士退官記念 中国水利史論叢』国書刊行会, 423-444.
- 「東京大学東洋文化研究所蔵『葉爾羌城莊里數回戸正賦各項冊』」『甲南大学紀要 文学編』51, 21-56.
- 1987年 「回疆都市ヤールカンド：景観的復原の試み」『甲南大学紀要 文学編』63, 39-51.
- 「歴史認識と歴史叙述」西川正雄・小谷汪之『現代歴史学入門』東京大学出版会, 61-91.
- 1989年 “Muslim Cities under the Ch'ing Rule,” *The Proceedings of I.C.U.T.* 3, 375-399.
- 「ウイグルの歴史と文学の研究状況：ウルムチでの見聞から」『西南アジア研究』30, 82-89.
- 「エンヴェル＝バイトゥル氏の近業『ハミーデイ史』について：紹介と『序文』訳」『甲南大学紀要 文学編』71, 36-46.

- 1990年 「ウイグル民族の生活文化」小玉新次郎・大澤陽典『アジア諸民族の生活文化』阿吽社、181-207.
- 「イスラーム都市の街区：中央アジアの場合」『イスラームの都市性研究報告（研究報告書70）』、1-30.
- 1992年 「カシュガル旧城居住街区の点描：Kona Orda Kocha にいたるまで」『環境と文化』（甲南大学総合研究所叢書26）、37-56.
- 「19～20世紀 中国と内陸アジア」間野英二他『（地域からの世界史6）内陸アジア』朝日新聞社、157-178.
- 1993年 「回疆玉米考」『東洋史研究』52(2)、102-121.
- 「吐魯番坎儿井の起源：論其拡張的理由」『干旱地区坎儿井灌溉国際學術討論會文集』烏魯木齊.
- 1994年 「清代回疆の耕地面積：流れる水から動かぬ大地へ」『甲南大学紀要 文学編』90、16-35.
- 1995年 「草原の道」歴史学研究会編『（講座世界史1）世界史とは何か』東京大学出版会、285-311.
- 1997年 「文献資料からみたトルファン付近」『沙漠研究』6(2)、203-207.
- 「『大木文書』の年次についての補論」『内陸アジア史研究』12、13-22.
- 1998年 「回疆犯科帳：清代漢籍史料からみたる社会の一断面」『甲南大学紀要 文学編』105、24-42.
- 「ウブサラ大学所蔵の二片の回疆公文書」『内陸アジア言語の研究』XIII、71-82; 18、19.
- 1999年 「トルファンの回子たち：嘉慶年間の軍機処文書の一端の紹介」『甲南大学紀要 文学編』109、64-84.
- 「天山北麓の故城跡」『ユーラシア遊牧社会の歴史と現在（国立民族学博物館調査報告別冊20）』、463-491.
- 「新疆の「地方志」」『内陸アジア史研究』14、1-23.
- 2000年 「新疆経済史の可能性」松田孝一『東アジア経済史の諸問題』阿吽社、161-175.
- 2001年 「回疆の社会経済文書について：チャガタイ語文書の紹介を中心として」『西南アジア研究』54、84-107.
- 「回疆社会経済史研究とマンジュ語史料：佐口透氏所蔵の一文書の紹介」『満族史研究通信』10、82-109.
- 「ヤルカンド＝オアシスの水利用：歴史学の立場から」総合地球環境学研究所 オアシス＝プロジェクト研究会『オアシス地域研究会報』1(2)、75-87.
- 2002年 “Historical Aspects of Arid Land in Western China,” Research Institute for Humanity and

Nature (ed.), *Project Report on an Oasis-region 2* (1), 15–23.

2003年 「『大木文書』のベクたち：北京第一档案馆所蔵資料との検証」『甲南大学紀要 文学編』129, 1–33.

2004年 「清代『葉爾羌』の境域」『甲南大学紀要 文学編』134, 93–122.

2005年 「オアシスに生きた人々」松原正毅ほか『ユーラシア草原からのメッセージ：遊牧研究の最前線』平凡社, 63–82.

「清代ヤルカンドの農村と水路」『甲南大学紀要 文学編』139, 153–191.

2006年 「ヤルカンドの街区：旧城内の歴史的プラン復原の試み」『甲南大学紀要 文学編』144, 11–39.

2007年 「ヤルカンド＝オアシスの拡大」新免康『(文科省科研費成果報告書) 中央アジアにおけるウイグル人社会の変容と民族アイデンティティに関する調査研究』中央大学, 41–51.

2008年 「中国・新疆の『地方志』の現段階：現代化の十年(1998～2007)」『アジア研究：文化の多様性と現代化』(甲南大学総合研究所叢書 32), 28–43.

“The Expansion of the Yarkand Oasis”『甲南大学紀要 文学編』154, 37–51.

「1836年カシュガル ワクフ文書の研究」A. ジャリロフ・新免康ほか『「ターリーヒ＝ラシーディー」テュルク語訳附篇の研究』NIHU プログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点, 41–43.

「東トルキスタンのバザールとウスタン」清水宏祐『(文科省科研費成果報告書) 映像資料のデジタル処理とネットワークの構築』九州大学, 27–38.

2012年 “A Reconsideration of the Yarkand Document in the Oki Collection,” *Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko* 70, 79–109.

2017年 「1983～2007年の新疆事情調査：私的回顧と全体展望」中央大学政策文化総合研究所研究報告『日本とユーラシア社会：調査の現場から』中央大学, 27–38.

2020年 「中央ユーラシア史の私的構想：文献と現地で得たものから」松原正毅『中央アジアの歴史と現在：草原の叡智』(アジア遊学 243) 勉誠出版, 50–69.

梅村注：公刊物としてはこれが堀さんの絶筆であろうと思われます。なお「先学を語る——山田信夫先生——」『東方学』140, 2020年, 92–13 (2019年10月29日於大阪大学文学部本館)が、おそらく公となる発言記録の最後と思われます。

* 参考：「堀直教授退職記念文」・「堀直教授略歴」・「堀直教授業績」『甲南大学紀要 文学編』159 (2008年度)、2009年、11–28頁。その中から狭義の学術論考のみを選択。補足と修正にあたり、松田孝一、菊池忠純、澤田稔、北村高各氏の教示を得たことを記して感謝します。

(中央大学名誉教授、公益財団法人東洋文庫研究員)